

東方 優しくて狂気な少年
年の幻想郷

tomomi2525

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プロローグ

お前さえ居なければ…！

お前さえ…お前さえ…！

キヤハハwwだっさーww

無様ねえww生きる希望失くした顔してちよーウケるww

ホントホントwwその波紋似合ってるわよ！ww中二病乙ww

こんな顔でよく今まで生きてきたなw

親が可愛そうでならねえなww

死ね…死ね…死んじやえ!

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね…!

死んでしまえ!

「うわああああ!!?」

また、あの夢だ…

「はあ……はあ……」

毎日毎日見る夢…

「つく…!?!」

この顔のせいで、親から学校の先生から同級生から拒絶されて、見下されてイジメられて…

「おえええー………はあ…はあ…」

毎日…毎日…毎日毎日

その日に起きた事が夢に出てくる…

……もう嫌だ………こんなの………

左頬にある波紋………これさえ………これさえなければ……!

死にたい………

こんな思いをするくらいなら………

どうも初めまして

とある人のSSを読んで影響されて自分も書いてみようと思い、幻想入りシリーズに手を出してしまつたtomomi2525です！

初めてなだけあつて色々と至らない所もありますが、生暖かい目で読んでくれると嬉しいです！

また、シリアス系、グロ系もあるので、苦手な方は注意して下さい！

(二話以降はひとまずほのぼのになるかと…汗)

また、東方projectの原作は紅魔郷く風神録、深秘録、憑依華、二次創作物しかやっていませんし、未クリアです…(紅魔郷く風神録が未クリアで深秘録、憑依華は一応クリア済み)

なので、「あれおかしくない?」と思う所もあるかも知れませんが、出来るだけ原作崩壊しないよう努力しますが、崩壊しかねないのでここは要注意です。

あとは脱字誤字もあると思うので注意して下さい。

それくらいかな?

長くなりましたが本編へどうぞ！

目次

第一章「幻想入りと出会い」

第一話「幻想入り」	1
第二話「紅魔館の住人前編」	15
第三話「紅魔館の住人後編と再開： ？」	35
第四話「幻想郷救世主？」	46
第五話「幸希の修行」	56
第六話「咲夜の過去」	71
第七話「ならず者の二人」	94

第一章【幻想入りと出会い】

第一話「幻想入り」

いじめっ子女A「相変わらず中二病みたいで気持ち悪い奴ね〜w w w」

いじめっ子女B「ホントホントw 死人みたいな顔しちゃってさーw w w」

いじめっ子男A「こんな奴がいるなんて考えられないよw 生きる価値ないってw 死んだ方が世の中の為だぜ？早く飛び降り自殺でもしたらどう？w」

今日も学校に来ればこれだ……

左頬にある波紋のせいでいつもこうやって……

死人みたいな顔って……お前らがそうさせたんじゃないか……いつもいつもいじめて……父親からも半殺しの目に合わされて……それでも生きてる事に不思議だけ……

まあいつもの事なだけ……

俺の左頬には生まれてからずっと波紋があつた……

おぎゃ！おぎゃ！おぎゃ！

助産婦「おめでとうございます！男の子です！……これは？」

母親「…やっと生まれてきてくれたわね…良かったわ…どうしました？」

助産婦「……」

ガチャ

父親「生まれましたか?!男の子ですか?女の子ですか?」

助産婦「男の子…なのですが……」

父親「何ですか?何かあるんですか?」

助産婦「…見てもらった方が早いです」

父親「分かりました」

ガチャ

父親「…何だこの頬は!!」

それは、左頬に真つ黒の波紋があつた…

ドス黒さを醸し出し、狂気さえも感じさせられる禍々しく歪な波紋が赤ん坊の頬にあつた。

父親「…これが俺の息子なのか……」

まるで哀れ見るかのように自分の息子を見ていた

しかし…それを見た母親は

母親「なんですかその目は!」

父親「なっ！」

母親が父親もとい夫に哀れ見る態度に怒りをぶつけた。

母親「自分の息子なんですよ!?!左頬に波紋のようなあざがあるのが、自分の子に変わりはないのです! なんなら、皮膚科にでも見てもらって治して貰えればいいじゃないですか!」

全くの正論に何も言えない父親。

母親「そんな事よりもこの子の名前!」

母親は既に決めていた:

母親「この子の名前は:幸希(ゆうき)。単純だけど、幸せに:そして、生きる希望を持って欲しい:周りになんて言われようと、貴方は幸せになる希望を持って欲しい:そして、大切な人を幸せにして欲しい:それが私の願い:」

父親「:」

母親は、俺に「幸希(ゆうき)」と名付けてくれた。

母親がつけてくれたこの名はとても気に入っている。

それから翌日皮膚科に頬を見てもらう事になったが:

皮膚科の先生「これは: : : :見た事ありません:初めて見ます:」

父親「治せるんですか?」

皮膚科の先生「…やるだけの事はしますが、保証は出来ません…」

母親「お願いします！」

皮膚科の先生「…分かりました、最善を尽くします！」

そして、俺の頬を見た皮膚科の先生だが…

皮膚科の先生「…残念ですが私には何も出来ませんでした…」

父親「な…」

皮膚科の先生「申し訳ございません…」

俺の頬の波紋は治せないとのこと…

そして、母親と赤ん坊の俺は退院するも周りの人から馬鹿にされ、笑われた。

父親はそれを見て嫌気がさし、いつも母親とケンカしていた…泣きじやくる赤ん坊の俺の隣で……

そして、物心がついたある日

母親「っ…」

母親は倒れた…

医師からはガンと伝えられ日々のストレスのせいだと……しかも、レベル5と来た…

速球に入院を余儀なくされたが…その後はすぐに亡くなってしまった…

母親は最後に…

母親「幸希…私が死んでも貴方生き続けなさい…！希望を忘れずに絶対に幸せになりなさい！私は貴方を見守っているわ…何があるうと屈服したり負けちゃだめよ！大丈夫…貴方なら出来るわ…！」

幸希「お母さん…死んじや嫌！」

父親「もう話すな！死に急ぐだけだぞ！」

母親「貴方…この子は忌み嫌われて貴方も嫌つてたわ…でも決して悪い子じゃない…私には分かる…大事に育ててあげて…私の最後のお願ひ…幸希…」

幸希「お母さん…」

希望を忘れずに…幸あれ…

ピーーーーー

幸希「お母さん！死んじや嫌だ！お母さんお母さんお母さん！」

それが最後の言葉として亡くなった…

俺はお母さんっ子だったし、周りが俺を馬鹿にしてもいつも、「気にすることは無い幸希は幸希よ！個性を馬鹿にする人なんか気にしちゃいけない！」

と口癖のように言っていた……いつも母親に助けてもらった……守ってもらった……けれど、母親が死んでからは……父親は、止める者がいなくなったせいかな、俺に暴力を振るようになった……

母親が死んだのは俺のせいだとい……

それから、小学生、中学生と何とか行けたものの、学校では左頬の事でいつもいじめばかり……皮肉にも先生にも馬鹿にされた……

もう生きる希望が無い……と思つた矢先

幸希「東方……project？」

それは、インターネットサーフィンしている時に見つけたもの

東方project

それを見つけた時、俺の人生は大きく変わった。

最初はアレンジ曲や原曲を聞いていたが次第に、原作にも手を出すようになった。

それと同時に気持ちも楽になってきた。

学校や自宅ではいつものように、いじめ暴力はあつたけども、東方projectの

お陰で生きる希望を維持する事が出来た。

こういう物は批判されがちではあったが、そんな事はどうでも良かった。

癒しがそこにあり、生き甲斐があつたから……

そう……東方projectはこんな俺に生きる希望をくれた……

そして、色々なものに手を出した。二次創作、mmd、それからゆつくり実況……どれ

もこれも楽しくて楽しくて仕方がなかった。

十六夜咲夜の寿命ネタや幼霊夢、霊々夢には涙した……

東方projectに出会えて良かった！

そう思うよになり三年がたった。

今ではある程度キャラクターも覚え、スペルや各キャラクターの能力も覚えてきた……

そんなある日

幸希「さ、今日もストレス解消に東方projectの動画か原作でもプレイして……」

ドガッ

幸希「え……」

今何が起きたのか分からなかった……

目の前でパソコンは横たわり、画面がぷつりと切れしまった。

父親「いい年こいて何やってやがる…ヒック」

父親が酒を飲んで帰って来てた。

しかし、父親の言う事なんざ聞けなかった…

何故なら…

幸希「うわあああああああああ!!!?!?!」

唯一の生き甲斐である東方 p r o j e c t の動画見れる、原作がプレイ出来るパソコンを目の前で壊された。

傍から見ればたかが知れているかもしれない。

馬鹿げているかも知れない。

だけど、俺にとっては死活問題だ。

生き甲斐であり、生きる希望だった…それなのに…それなのに…コイツハ…

父親「何だ?急に叫んでうるせえだろ!」

ドガッ

幸希「…ツ」

俺は左頬を殴られだが吹っ飛ぶ事も痛くて顔をしかめる事も無かった…変わりに…

父親「…な、な、何だよそれ!」

幸希「……」

俺は無言で父親に近寄った

父親は恐怖のあまり酔が冷めたどころか、顔を青くして顔をしかめていた。

幸希「……………シネ」

ただ、その一言だった…

スパン！

金属音がしたと思ったら…

ドサツ…

幸希「……………」

父親の首ははねられ、首元からは血が噴射していた。

それを無言で返り血を浴びながら、しばらく見据えていた。

そして、我にかえり…

幸希「…え？お父さん？」

幸希はまるで何かに支配されていたかの様に、父親を殺した。しかし俺は記憶していた。

だが、不思議と罪悪感は無かった…。

むしろ、殺す事が出来て良かったとさえ思える。

傍から見れば親殺しに変わりはないのだが……

幸希「…この際だアイツラも…」

そして、次の日

いじめっ子男A「今日も懲りずに来たか中二病さん？w」

いじめっ子女A「相変わらず湿気た面してるわねw親が泣くわw w w」

いじめっ子女B「キモーイw w w」

キモw死んじやえばいいのにあんな奴w

キチってるわねえw

幸希「…生憎親はもういない」

いじめっ子男A「あ？」

スパン！

いじめっ子女A「え？」

いじめっ子女B「きゃあああああ!!」

殺人鬼だ！みんな逃げろ！

幸希「ニガサナイヨ！イママデノオレイシナイトネ！」

俺は狂気を帯びたかのように同級生を殺しまくった。

ただ、ひたすら殺した。

死んでも殺した。

刺して、頭をもぎ取り、心臓をえぐり出してやった。気が済むまでやった。

しかし、流石に騒がしくしすぎたのか先生達が来た。

先生「な…何だこれ…！」

俺は四階の窓から抜け出していた……そして、空中に留まり先生達の様子を見ていた。

先生「は、早く救急車と警察！」

そして、そのまま屋上まで飛びしばらく様子を伺った。

警察や救急車は事情聴取や、死体の処理をしていた。

そんな光景を見ても俺は何も思わなかった。

これで良かったのだと……まるで何かに支配されているかの如くそう思った…。

幸希「はあこれからどうするかな…」

親もない、同級生は皆殺し、家帰ってもパソコンは起動しないから東方に関して何も出来ない…

幸希「…帰るか」

一応帰ることにした…やる事なんて無いけど…

幸希「…ただいま」

相変わらず死体は転がったままになっていて、誰も出迎えない。

幸希「こんな所お母さんが見たらどうなるんだろうな……」

俺はベットに座りお母さんがいたらどうなってるかなと、この現状を見たらどうするだろうと、考えていた。

幸希「お母さん……」

俺は泣いていた……情けなく泣いていた……

年ももう16を超えるというのに……

俺は泣きながら、眠りについた……

ゆ……………き……………

ゆ……………き……………

お母さん……？

ま、待ってよ！お母さん！待って、待ってよ
待っててば！

お母さん！

幸希「……っは！」

幸希「…夢…何でお母さんが……」

今まではいじめや暴力の夢ばかりでお母さんの夢なんて見た事無かったのに……
しまいには、涙も流していた……

幸希「…つてここは……？」

目が覚めるとそこは見慣れない木々が……

森の中なのは分かるが……

幸希「どうしてこんな所に……」

そう言えば、二次小説で東方 project の幻想入りなんてものがあつたっけ……よくこういう森からスタートするみたいなの……

幸希「あるわけないか……」

しかし、何もする訳にも行かないからとりあえず歩く事にする

森の中のせいで夜か昼間かよく分からない。

ここは一体何処なのか……何故ここにいるのか……

幸希「まさか誘拐？」

あり得ない……ならどうしてこんな所に……

歩きながら考えていると……

幸希「…森から抜け出せた……つて夜か……」

何とか森を抜け出す事に成功

しかし、目の前に暗くてよく見えないが何か建物のシルエットが見えた。

幸希「良かった…」

建物があるという事は誰かしらいるという事。

ここが何処なのか聞かないと。

足早に向かう…そして、そのシルエットが視認出来る所まで来ると、早足で歩く足が止まった。

幸希「う…そ…だろ!!」

夢でも見ているのではないのか…そう思うほどその建物に親近感、そして、見覚えがあった。

目の前に見えたもの……

幸希「紅魔館…」

第二話「紅魔館の住人前編」

レミリア・スカーレット

それが私の名前だ。

そして、5歳下の妹、フランドール・スカーレットがいる。

さらに、本来であれば更に5歳下の今は亡き弟がいた。

名前を、ハピネス・スカーレット

私達は「ネス」と愛称で呼んでいた。

ネスの左頬に波紋があつた。さらに彼はフランとは別の、狂気を持っていた。それらがあつてか、二人は忌み嫌われていた。

そんなネスだが、いきなり現れた怪物に襲われ私達を庇い、息絶えた。

レミリア「ネス……」

私はネスに何もしてやれなかつた……。

とても辛かつた……。悔しかつた……。

私は紅魔館の主でありながら、姉でありながら彼のそばで泣きじゃくつた。情けない程に……。

レミリア「!?」

レミリア「これは…?」

未来予知…

微かだが何か見える…何だあれは?

レミリア「人間…?」

人間が何故…

レミリア「な!?」

左頬に…波紋が…

私の能力

「運命を操る程度の能力」

未来予知を見たり人や妖怪の運命を多少だが、いじることが出来る能力。

未来予知は、気まぐれの如くいきなり見えるときがあり、今それが見えた。

それも、「左頬に波紋」がある少年がここに来る…

生まれ変わりだとも言うのかしら…?

分からない…分からないけどこの人間を招き入れた方が良く、私の堪がそう告げている。

霊夢程ではないが、私の勘はあたる。更に未来を見た上での勘なのだから可能性はかなり高い。

咲夜に報告しなくては…

私は咲夜を呼ぶ為に指を馴らした。

夢を見た…。

それは、弟のネスと再開する夢だった。

あれ？ネス？ネスなの？

うん、そうですよ！フランお姉様！

フラン「ネス！」

私は彼に飛びついた…

フラン「…」

飛びつくと同時にどうやら、目が覚めてしまった様だ。

だけど、自然と寂しさを感じない。

寧ろ、幸福感でいっぱいだった。

フラン「ネス…」

私はネスが大好きだった…。

私とは違った狂気を持っていてよく喧嘩の様な事を…したらしい。

と言うのも狂気になってる時は、あまり記憶がなかった。彼も同様に。

でも、普段彼はとても優しくかった。

ある日私達は幽閉させられたが、彼とはよく遊んで時には喧嘩もしたけど、でも、私が悪くても、悪くなくても、彼はいつも先に謝ってばかりだった…私だって悪い時があったのに…その都度、私が先に謝ることが出来なかった…それがいつも齒がゆくて仕方なかった…。

あの時も、彼は謝ってたっけ…。

フラン「…でも、何でネスが夢に…」

今までは、それこそ死に別れてから直ぐに夢に出てきた。

ネスがいなくなってしまう夢…

でも、ここ100年くらいはぷつりと見なくなつた。

なのに、何故今日になつて…

フラン「もしかしたら…!」

可能性はゼロじゃない!

私はいつも彼が言っていたそれを信じ、お姉様の部屋に向かった。

幸希「…嘘だろ?!紅魔館が何で…」

俺は夢でも見てるのだろうか?目の前に、東方Projectに出てくる紅魔館がそこにはあった。

いや、もしかしたら、似てるだけかもしれない…。

幸希「そ、そうだよな、たまたま似てるだけだよな」

俺はそんな事はないと思うながら近づいた。

門前まで来てそれはハズレていた事が明らかになった。

目の前に、あの中国とか言われてる居眠りばかりこくあの……
何だっけ?

えーつと…ベニ ミスズ?

…うーん違う気がする……

幸希「なっついていったっけかな…」

門番らしき人「ムニヤムニヤ」

名前を思い出そうとしながら近づくと、そこには案の定と言うか、夜だからか、たまたま居眠りをこいてる美人で、緑色を主体にした中国服の様な服を来た、赤髪のロングヘアの人がいた。

明らかに東方projectのキャラクターだ。

しかし：

誰だっけ…？

相変わらず忘れられやすい人だなと我ながら何を思ってるのやらと、門番らしき人の所まで来て話しかけようとする：

門番らしき人「…ふああ…どちら様でしょうか？」

目を擦りながら、俺に問いかける。

「気を操る程度の能力」

を持つ彼女…てか、名前を覚えてないのに能力は覚えてるって…

門番らしき人「…何だか酷いことを考えていられるような気が…」

幸希「気のせいです」

とりあえず適当に誤魔化す。

相変わらず、美人だな…名前忘れたけど

門番らしき人「…それで、貴方は？」

あ、そうだな。名前くらい名乗らないと…

幻想入りした事と、名前を思い出すのに忙しかつたから、名乗り忘れてしまった。

幸希「幸希です。…気がついたら後ろの森の中で気絶してまして…」

どうして、気絶していたのかは分からない。

それに、何故幻想入りしたのかも…

門番らしき人「そうですか…あ、私、紅 美鈴（ほん めいりん）です。この館、紅魔館の門番をしています。」

幸希「あ、思い出しました！」

美鈴「はい？」

突然叫ぶ俺に動揺を隠せない門番事美鈴

幸希「気を操る程度の能力の持ち主で、武術を得意とし、妖怪でありながら、人妖、幽霊に妖精にも親しまれているあの居眠り門番！紅美鈴！」

幸希「あ…」

言うだけ言つて、その一言、言つたのがヤバイことに気づいた。

さ、流石に彼女の事を知ってるのはまずいかな…？

様子を伺うと…

美鈴「えー！何ですかーそれ！居眠りだなんて…一応、居眠りしていても誰が来た

か気でわかります！」

凄いけど、胸張って言えることじゃない。

美鈴「…って何で私の能力とか武術が得意って分かったんですか？私、話してませんが…能力者ならともかく…見た所人間の様ですし…」

幸希「あ…えと…」

やばいなあ…あまりこういう事って言っちゃいけないかった気がするだよな……どうしよ…

ガチャ

いきなり門の扉が開いたので二人してそつちを見ると

メイド長「美鈴（ミスズ）サボって無いわよね？」

美鈴「サボってませんってー！てか、ミスズって言わないで下さいよ！」

相変わらず仲がいいなこの二人…

メイドの格好した、銀髪の少女…

もし、外の世界に居たらモデルにでもなれそうな…いや、幻想郷にいる女性の方々はモデルになれるし、小中高ならモテモテだし…

メイド長「…お嬢様が彼をつれて来いと」

美鈴「なるほど、分かりました。幸希さん？」

と言うことは…レミリアアスカレットやフランドール・アスカレットもいるって事だよな!! ittyayっほーい!

幸希「hshs」

メイド長「?」

咲夜「…私、十六夜咲夜（いぎよいさくや）と申します、貴方は?」

「時を操る程度の能力」

時間を止めたり、速めたり遅くしたり…

チート級だろとツツコミを入れたところだが、霊夢にはコテンパンにやられてるし…決してチートでは無いんだよね…汗

時間を戻す事はできないし…

二次創作では、レミアラブだったり、メーさくだったり…彼女のカップリングも良さげなんだよな〜

因みに自分は、レミフラ派だけど。

年齢的に多分変わらないか少し年上だろう。

それに初対面相手にタメ口はいけないし、何よりタメ口は結構苦手だったりする…コミ症だし…

幸希「あ、はい! 幸希と言います!」

咲夜「幸希さんですね、レミリアお嬢様がお待ちです。レミリアお嬢様とはここ紅魔館の主です」

幸希「そうなんですか、そんな方とお会い出来るなんて光栄です！」

あながち間違いない。クソ食らいな人生を送って来て、東方Projectを知って、幻想入り出来るなんて夢にも見てなかったのだから……ん？夢なのか？

幸希「……いてててて！」

咲夜「……何をしているのかしら？」

美鈴「……はは」

頬をつねったが痛いだけ……後、二人の視線も痛い辞めて……

紅魔館

廊下

やっぱり広いな……ここ

いや、図書館のほうが広いか……確か、目の前にいる女性……

十六夜咲夜……が空間を弄って広くしたとか何とか。

咲夜「お嬢様は人間は好きでも嫌いでもありませんが、もしお嬢様の逆鱗に触れれば、貴方の命は無いと思ってくださいね。お嬢様は、優しい方ですが、ワガママなところも

ありますので」

おいおいそれ言っちゃっていいのか…

俺は心の中でツツコミを入れた。

咲夜「…」

幸希「どうしました？」

俺の顔を見てる…左頬に波紋の事だろうか…

咲夜「いえ、何でもございませぬ。…こちらがお嬢様のお部屋です。粗相のないように…」パチン

指を鳴らし目の前で、煙の様に消える。

時間移動か…

目の当たりにすると少しびっくりするな…

八雲紫同様にいきなり現れないで欲しいな…汗

憧れ…あ、いや、一推しの彼女に会えるなんて…

幸希「スーハー…スーハー…よし！」

俺は深呼吸をして、扉のドアをノックした。

紅美鈴

「ムニヤムニヤ」

何があつても諦めてはいけません！大丈夫！貴方は頑丈でとても強い方だから、気持ちも強く持つて下さい。

ハピネス様、私は大丈夫です！気丈ですから。

そうでしたね。もし、もしもですよ？仮な話ですが自分が何かの理由で、死んでしまつたり、離れ離れになつたとしても、お嬢様達を守つて欲しいのです。そして、貴方も死なない様に…命大事にしながらお嬢様達を守つて下さい！

難しいですね…てか、何故ハピネス様はその様な…ハピネス様、冗談でもその言い方は…

そうですね。少し感傷的になつてまして…

ハピネス様…

美鈴「…ふああ…どちら様でしょうか？」

誰かが目の前にいますね…

どこか懐かしい…

てか、何だか失礼な事考えてそうな顔されてる…

美鈴「…何だか酷いことを考えていられるような気が…」

幸希「気のせいです」

誤魔化しましたね…まあいいか…涙

美鈴「…それで、貴方は？」

左頬に波紋…

まさか…ね

幸希「幸希です。…気がついたら後ろの森の中で気絶してまして…」

門番らしき人「そうですか…あ、私、紅 美鈴（ほん めいりん）です。この館、紅魔館の門番をしています。」

幸希「あ、思い出した！」

美鈴「はい？」

突然めの前で大声でいうので少しびっくりしてしまった。

幸希「気を操る程度の能力の持ち主で、武術を得意とし、妖怪でありながら、人妖、幽霊に妖精にも親しまれているあの居眠り門番！紅美鈴！」

幸希「あ……」

何故そこまで知ってるんですか！やっぱり生まれ変わりましたか？！

って、居眠りって！

美鈴「えー！何ですかーそれ！居眠りだなんて……一応、居眠りしていても誰が来たか気でわかります！」

懐かしい方の夢を見てたのに邪魔して！

てか、

美鈴「……って何で私の能力とか武術が得意って分かったんですか？能力者ならともかく……見た所人間の様ですし……」

幸希「あ……えと……」

正直心の中で焦っていた。もしかしたらもしかしたらと……

はやる気持ちをよそに

ガチャ

メイド長「美鈴（ミスズ）サボって無いわよね？」

美鈴「サボってませんってー！てか、ミスズって言わないで下さいよ！」

相変わらず酷い言い様……

上司と言えど私はずっと歳上なのに……涙

メイド長「…お嬢様が彼をつれて来いと」

美鈴「なるほど、分かりました。幸希さん？」

やはり彼には秘密がある様ですね…

あの方と同じ左頬に波紋…

可能性はある。

いつもあの方は口癖の様に言っていましたっけ…

幸希「h s h s」

メイド長「？」

咲夜「…私、十六夜咲夜（いざよいさくや）と申します、貴方は？」

幸希「あ、はい！幸希と言います！」

咲夜「幸希さんですね、レミリアお嬢様がお待ちです。レミリアお嬢様とはここ紅魔

館の主です」

幸希「そうなんですか、そんな方とお会い出来るなんて光栄です！」

軽く挨拶をしたあと、幸希さんはお嬢様とお会い出来ることが、心底嬉しそうだ。

気になるが今聞くべきでは無い気がした。

幸希「…いてててて！」

咲夜「…何をしているのかしら？」

美鈴「…はは」

相変わらず…と言うか何というか…あの方とそっくりですね…

彼は咲夜さんに導かれてレミリアお嬢様の所に行った…

しかしあの左頬の波紋…

可能性はあるかも知れませんが…

もし生まれ変わりなら…

十六夜咲夜

お嬢様から命名されてから、数十年たった。

幻想郷に来て、「紅霧異変」を起こした。

そして、霊夢達に負け今に至る。

その前に「吸血鬼異変」と言うのを起こしたと仰っていたが、私はその頃にはいなかった…

言ってしまうえば、私は幻想入りの人間

幼女期に拾われて、メイドとして働く事になった。

そして、そんなある日それは突然に……
パチン

お嬢様がお呼びのようだ。

私は仕事を一次中断して、時間を止めお嬢様の所に向かった。

まるで見た目は画像や映像にエフエクトをかけたかのように、色が反転している。

この時間こそ自分の時間（ザ・ワールド）

そして、お嬢様が座ってる脇にたつて、時間を進ませた。

そして、時は動き出す。

咲夜「ここに」

手を揃え頭を軽くおろし会釈する。

レミリア「ごめんなさいね急に呼んで」

お嬢様はいつも私を気遣って謝ってくれる。嬉しいは嬉しいけど、これも仕事のうち

……紅魔館のご当主様が謝ることは無いのだ。

咲夜「いえ、これも仕事のうちです。」

私は、仕事のうちと言っているがこの言葉の意味は、自分の事を含めてと言う意味だ。

お嬢様がいて私がいる。それは拾われた時から変わらない。

レミリア「ええそうね……それで呼んだ理由についてなんだけど……」

それは、未来予知によるものだった。

人間が、外来人がここに来るとの事、そして、ここまでソイツを案内してくれとの事だ。

人間？ 外来人？

私は何を言っているのか一瞬戸惑った。

いくら何でもおかしい。確かに吸血鬼であるレミリア様は人間である私や霊夢、魔理沙とは交流がある。

しかし、それ以外はまるで興味を示さない。それが普通なのかもしれないが…。

私も正直霊夢や魔理沙以外の人間は興味などない。所詮、家畜でしかないのだから。

咲夜…咲夜…

レミリア「咲夜聞いてる？」

咲夜「あ、すみません…考え事をしていました。」

レミリア「疲れてるの？無理しちゃだめよ？」

相変わらずお嬢様は優しいお方だ…

こんな自分を拾ってくれたあの日から何も変わらない。

咲夜「それでは、美鈴に伝えきます。」

レミリア「ええ、おね…」

ガチャ

フラン「お姉様！」

レミリア「フラン、入る時はノック位……」

フラン「今日、ネスの夢見たの！」

レミリア「なっ！」

二人が何を言っているのか私には分からなかった。

「ネス」と言った……誰かの愛称か何かだろうけども……

レミリア「……可能性はやはりゼロでは無いわけね……フフ」

レミリア「咲夜」

咲夜「は、はい！」

急に呼ばれたのでびっくりしてしまった。

レミリア「彼を丁寧に招き入れなさい」

咲夜「は、仰せのままに」

とは言うものの……

なぜそんな人間に肩入れするのか……

その「ネス」と言う人（？）と関係するのかしら……

まあ、そのうち分かるでしょう。

門番に伝えなきや…

咲夜 「それでは失礼します」

パチン

私は指を鳴らし、門前にいる美鈴に事を伝えに行った。

e
n
d

第三話 「紅魔館の住人後編と再開……？」

パチエはとても凄いですね！その歳で魔法を熟知してるとは……

僕もまだまだですね！

いや……貴方の方がよっぽど凄いでしょ……

私の何十倍と生きていて、何十倍の魔力、知力を有する貴方に敵うわけ無いわ。パチエ、そんな悲観的にならないで下さい。

いや、別に悲観的には……

可能性はゼロじゃありません。僕は結局吸血鬼。

だから、ここまで来れたし、魔法も覚えられた。

けど、人間や魔法使いだったら？そこまで行かなかつた。

でも、パチエ、貴方は魔法使いの間では扱うのが難しいとされてる魔法をいとも容易く扱う。

僕でさえ、何百年かけたものを。

……そんなに褒めたって

パチエー!

な、なによ!!

可能性はゼロじゃない…忘れないで下さいね。

ば…チユ…様…チユリ…様

パチユリー様!

パチエ「ん…」

コア「もう!そんな所で寝てたら風邪引きますよ!」

パチエ「あら、コアどうしたの?」

どうやら私は本を読みながら寝ていたみたいね。

俗に言う寝落ちってやつかしら。

しかし、随分と懐かしい夢を…

可能性はゼロじゃない…か

あの子はいつもそれを口癖に…そして、私を褒めてくれた。私の魔法や魔力を…私が最初に吸血鬼三姉妹にあつて、フラン、ネス二人とも凄い魔力の持ち主だった。特に、ネスの魔力はとんでもなかった。

そして、何よりその知識量と言ったら……

あの子には到底敵わないわ……。全く、レミイもフランもネスもとんでも無いわ……。そんな彼女らと数百年友達、家族として過ごしてる訳だが……

パチエ「それで？ どうしたのかしらコア」

寝てる所を起こしたんだ。それ相応の理由があるのだろう。

コア「レミリアお嬢様がお呼びです」

パチエ「レミイが？」

コア「何でも、変わった外来人が来たとか」

パチエ「外来人？」

コア「はい、何でも左頬に波紋がある様です」

パチエ「！」

私は目を見開いた。それを聞いただけで彼じや無いかと思った。

パチエ「コア！ 貴方はその外来人にあつたのかしら？」

コア「いえ、まだです……ですが、あの時の彼なら……嬉しいですね……」

小悪魔事、コアもネスとは知り合いだった。

と言うか、紅魔館メンバーとはいっても四六時中話してた（咲夜との面識は勿論ないが）。……そんなイメージが強かった。そして、分け隔てなく、平等に私達を見てくれてい

た。

しかし、本当にあの彼なのだろうか？

だが、そんな気持ちは拭い去る何故なら：

パチエ「フフ、可能性はゼロじゃない。コア行くわよ」

コア「そうですね、会ってみましょう！」

転送魔法で紅魔館の主の部屋まで移動した。

く少女移動ナウく

コンコン

どうぞ

ドアをノックすると、ここの館の主であるレミリアから返事がきた。

俺は「失礼します」と一言いいドアを開け中に入った。

相変わらずというかなんというか：

部屋 m m d で使用されるような部屋だった。とても分かりやすい。

そして、目の前にはレミリア：気のせいだろうか？心なしか羽をパタつかせて、目が輝いてる様に見える。うんかわいい嫁にしたい。

そして、その脇に同じ様に：少し違うか、キラキラした羽をパタつかせてる。何かを期待するかの様に……俺を見ているのかな？

そして、パチュリーと小悪魔もいた。

てか、コアいるんだ。

コア「いや、いくら何でもひどくないですかね？」

心を読むのはやめましょう。めんめ！

幸希「始めまして、幸希です」

俺はドアを占め、少し前に出て挨拶をした。

流石にこんな所で自分の性癖を晒すほど勇気なんてない。殺されるし絶対……

ああ……でも今すぐにも抱きしめたい……忠誠心を鼻から出したい。

レミリア「ええ、始めまして、私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ……つて鼻血出てるけど大丈夫かしら？」

どうやら忠誠心が出ていたようだ。持ってたハンカチでふく。

存じてますぞ！かりちゅまやカリスマ（笑）やドアノブカバーやバツシユゴーや色々馬鹿にされてる方ですよね！……でも、なんだかんだ言って家族思いで、家族に危害が

あれば全力で守る…その姿勢に惚れるぜ…

幸希「すみません大丈夫です」

レミリア「そう…：フ、フラン挨拶しなさい」

さすがお姉様！やはり高貴な人は俺みたいな低俗で敵対な人間でも、姉として挨拶をしつかり促す！そこに痺れる憧れる！

フラン「分かってますわ！私フラン！フランドール・スカーレット！フランって呼んでね！」

幸希「はい！フラン様よろしくお願いします！」

いくら知ってるキャラクターとはいえ、誰を呼ぶにしても様やさん位はつけないとね。

パチュリー「私は、パチュリー・ノーレッジよ、そして、こっちが…」

コア「小悪魔事コアです！以後お見知りおきを！」

幸希「はい！よろしくお願いします！パチュリー様コアさん」

しかし、誰を見ても美女、美女、美女だ…ハーレムかここは？h s h s

フラン「幸希！」

幸希「は、はい！何ですか、フラン様」

やましい事を考えていたお陰で、いきなりの問いかけにびっくりしてしまった。

フラン「幸希ってもしかしてさ……」
ネス？

幸希「…はい？」

フランは期待と不安の目をこちらに向けながら問いかけてきた。

ネス？誰の事だろか？友達か何かかな？

分からないや……

レミリア「フラン、辞めなさい、貴方の気持ちも分かるわ。でもその前に……」

パチン

幸希「うわっ！」

レミリアが指を鳴らすと目の前にさつきレミリアの部屋まで案内してくれた、PA

……咲夜が現れて腰が抜けそうな位びっくりした。

咲夜「ここに」

しかし、俺の事は構わずレミリアのお呼び出しに答える。

何かここの咲夜いい感じがしないなあ……

レミリア「紅茶をお願いするわ……5人分ね」

咲夜「かしこまりました」

パチン

レミリア「紅茶を飲みながらあなたの事聞かせてくれ無いかしら？生まれながら今に至るまで…」

幸希「え？」

俺のことを聞いて何になるのだろうか…俺の人生は糞くらいだ。
そんな話聞いたって…

レミリア「あら？不服かしら？」

心でも読んでるのかな？それとも顔に出てる？怖い事に変わりない。

余計な事を考えるのはよしたほうが良さそうだ。

幸希「滅相もございません…自分の話は面白いかわかりませんが、話させていただきます。」

レミリア「それでいいのよ…そういう運命なのだから」

パチン

音がしたと思ったらテーブルの上に紅茶が5つ乗っかっていた。

パチュリー達は各自適当に座り、俺も残った席に座った…と言つても真ん中なのだ
が…

幸希「それでは…生まれた時から話します」

そして、生まれてから今までの事を洗いざらい話した。

生まれてから父親や周りの人にこの類の事で忌み嫌われた事。

母親は気にするなど言ってくれたこと。母親が死んだ事。それから父親からの暴力が酷くなったこと。小中高学生ではいじめを受けていたこと。そして、我慢の限界がきて、父親同級生を皆殺しにした事。

でも、その中でいい事、東方projectに出会えて生きる希望が生まれた事。そして、ここに来たこと。

全部話した。終始皆無言だったけどちゃんと聞いてくれた。

俺は何だか救われた気がした。

きつと誰かに話して楽になりたかったのだろう。

レミリア「そう：貴方の今までの出来事って、いい事無しね」

パチュリー「でも、よくある話ね、自分の事しか考えてないのが人間だからね」

フラン「：幸希」

コア「うう：お母様が可愛そうです：グスン」

皆、俺の言ったことをそんなふうに聞いてくれるなんて：あかん俺も泣きそう

泣いていいっすか

レミリア「でも一つ気になる事を言ってたわね：確か」

パチュリー「東方projectと言うものね」

フラン「もしかしたら」

コア「ニヤニヤ」

レミリア「幸希」

幸希「はい？なんですか？」

レミリア「それは…ゲームとやらかしら？」

幸希「はあ…そうですが」

何を聞いているのかよく分からなかった。

この幻想郷にもゲームという物があるのだろうか？

まあ、ボードゲーム位ならあるだろうけども。

レミリア「そう…それじゃ一つ質問ね」

レミリア「それを作った人間の名前…いえ、ペンネームと言ったほうがいいかしら？」

幸希「え？」

レミリア「彼の名前…」

ZUN、でしょ？

幸希「な!!何故あの人の名前を！」

俺は絶句した。東方Projectと言うゲームのキャラクターに出てくる、キャラクターが目の前にいるだけでもびっくりなのに、その作品を作った張本人を言い当て

た。どういう事だ？何故彼女があの人のお事をを…

パチユリー「あー彼ね」

フラン「懐かしいわ！よく遊びに来てくれたよね！」

幸希「え、皆さんお知り合いですか？」

コア「知り合いも何も…」

私達を使ってゲームを作りたいって言い出した人間よ

第四話 「幻想郷救世主？」

お姉様…僕…お姉様達守れて良かった…

ツ
ツ

アイツ…追い払ったよ…ほめ…て

い
……や

死んじや嫌！死なないで！

幸希「っ！」

幸希「はあ……はあ……はあ……はあ……」

何だ今の夢…今までみたことない夢…

夢の内容を思い出そうとするが……駄目だ…

誰に対してお姉様と呼んでるのか掠れてて分からない。

とても寂しくも、幸福感を覚えるような…

幸希「…喉乾いた…」

俺は水を飲み台所へ向かった。

しかし、昨日はとんでもない事を聞かされたな……

—昨日—

俺はこの世界にZUNさんが既に幻想入りしていて、幻想郷の住人を使ってゲームを作りたいと言っていたとを聞かされた。

だけど、あれはフィクションって……

いや、逆に考えればそうやすやすと第三者が信じる訳がないか…。

だから、フィクションと言うことで東方projectを作ったのかもしれない。

レミリア「ちようど20年近く前かしら…」

パチエ「22年前ね」

フラン「よく覚えてるね！私なんか昨日の出来事のように感じるよ」

パチエ「噂では今だに來ているらしいわよ」

幸希「え？そんなんですか？」

だから、今も続いているのか…

レミリア「あらそうなの」

フラン「たまにはこっちにもくればいいのに」

コア「それで、今もその東方projectって出ているのですか？」

出ている何も……

幸希「いやもう有名中の有名、イベントもありますし、派生品もありますし…とんでもないです」

元々が良いのと、センスがあるからだろう。

何にせよ、あの規模は計り知れない。

コア「そうなんですな」

そこで、ある疑問を思い出した。

どうしても気になって仕方が無いので訪ねてみた。

幸希「あの、レミリア様」

レミリア「何かしら」

幸希「先程、フラン様が言っていた「ネス」さんとはいったい誰なのでしょう?」

レミリア「…」

気のせいかな?一瞬瞳が揺らいだように見えた。

フランも心なしか羽をばたつかせている。

パチュリーもコアも何だか期待をしているかの様に、それぞれ目を輝かせる。

レミリア「いいわ、貴方の過去を教えてくださいから、この際わ「はぁーい」

幸希「うわあ?!」

いきなり真横に異様な空間がでてきたと思ったら、胡散臭い女の人が出てきて、それ

にびつくりした俺はその場で情けなく尻もちをつく。

何でこうなるんだ……

そこに現れたのは八雲紫

神隠しの主犯……まさか本当に現れるとは……まさかこのスキマBB……境界を操る程度の能力を持つ彼女が俺をここに……可能性はあるな……やりかねない……

紫「ちよつと！いま失礼な事考えてたでしよ！」

それはそうとと、続ける

紫「レミリア、昨日ぶりね」

レミリア「いいご身分ね、人の家にずかずかと入り込んで」

まるで、犬猿の仲だ。レミリアは毛嫌いするかの様な言い方だ。

紫「そんな事言わないでちょうだい。吸血鬼異変からの付き合いじゃない……それに、

「彼女の約束」忘れたわけじゃ無いでしょう」

レミリア「……分かってるわよ」

彼女の約束？という事だろうか……

疑問が更に増えた俺を他所に、紫は自分のペースに持っていく。

紫「そうそう！幸希さんごめんなさい。ちゃんとこちらの世界に案内しようとしたんだけど、寝ていたのと、スキマに支障きたして、とんでもない所に落としちゃったのよ

…」

何ともありがた迷惑な話だ…

幸希「は…はあ、それは構いませんが…てか自分の事知ってるんですか？名乗ってもいないのに…」

いくら何でも怖いがな…名乗ってもいないし、聞いてたのか？

紫「事前にあなたの事を見てたわ…更に言えば…いえこれは言つてはいけない秘密だったわ。」

紫「それから、私の名前は八雲紫…つて知ってるわよね。」

そして、実はと切り返す紫

紫「貴方をここに連れてきた理由は2つあるわ」

幸希「2つ…ですか？」

レミリア「ちよつとまつてよ！勝手に話を進めないでくれる!!」

そこへ主さんから横棒が入る

レミリア「いきなり現れて、彼に何を吹き込むわけ？」

レミリアは幸希の事をまるで匿うような言い方をする。

紫「あらら？貴女、あつて間もない貴殿に対して随分と肩を持つのね…どうしてか
し、ら。」

悪びる事なくニヤニヤとレミリアを煽る紫
それにレミリアが嘯み付く

レミリア「は、はあ!?! な、何言ってるのよ…意味分かんない…」
明らかに不自然な返しだ。何やら動揺してる。

パチエ「…はあ、気持ちは分かるけど貴女らしくないわよ。」

パチユリーまで…訳がわからん。

紫「何でもいいわ。これから話す事は別に貴女達に損のない話よ。もしかしたら、彼
(幸希) が彼 (ハピネス) かも知れないのよ。」

レミリア「?!」

フラン「やっぱりそうなの!?!」

何が何だか分からない…孤立を感じる。

何を期待してるんだ彼女等は…

紫「まあ、とにかく聞いて、幸希さん貴方に力を貸してほしいの。」

幸希「どういう事ですか?」

紫「実はね…」

紫が話す内容はこうだ。

まず一つ目

まるで見透かしてるようにそう告げる紫

紫「ここを守ってくれれば罪滅ぼしになるはず…なんなら、閻魔様に頼んでみるわ」

幸希「どうしてそこまでしてくれるんですか？」

なんの円も縁もないこんな俺に…ただ、東方projectが好きただけなのに…

紫「強いて言うなら、さつきも言ったけど、幻想郷が滅びるくらいなら一か八か可能性にかけたいだけ。」

それにと続け…

紫「…こんな言い方は卑怯だけど、貴方は私達が出演してる東方projectと言う物に命を救われたのですよ？そしたら、その恩返しだと思つて…」

紫「だから…！どうかお願い…！この幻想郷を救つて…！」

幸希「なっ!？」

痺れを切らしたかのように、紫は幸希の目の前で土下座をした…

幻想郷トップに立つ賢者が…人間相手に土下座を…

レミリア達は啞然としていた…そして、幸希も。

賢者として有るまじき行為をまぬあたりにしたのだから。

その後は、了承を得たもののどうすればいいか分からないまま眠りについた。

小悪魔がレミリアに頼まれ、今話した事を咲夜、美鈴に伝える様に言いつけていた。パチュリーやフランは自室に戻っていった。紫もそのまま帰り俺は事前に咲夜から教えてもらった、自室にてベットイン。

なにも考えることなく寝落ちして今に至る。

救つて……か……

こんな俺に……出来るのか？

左頬を撫でながら自問自答するが、勿論答えなんて出てこない……。

何かしら考えなければ……

できるか分からんけど……ワンちゃん、スペルカード作ってみようかな……あ、その前に空を自在に飛べるようにならんと……

皆殺しにした時は、そんなに動いて無かったから浮いてられたけど……ついでだ、霊夢や各勢力達に挨拶しに行こう。

それじゃまずはレミリアお嬢様の所からかな。

思い立ったが吉日

俺はレミリアの所に向かう為頬を両手で叩いて気合を入れた。

e
n
d

第五話「幸希の修行」

俺はレミリアの所に行く為に廊下を歩いているが……

長い……

レミリアの所に行くまでに何分かかるんだ……

諦めようかと思いきうそうになる……

そう言えば、原作で咲夜が空間いじって廊下も長くしたとか何とか……

数分後何とか着いたレミリアの部屋

絶対咲夜の奴悪意あるだろ……

何で廊下の奥にあるレミリアの部屋から一番離れた部屋が俺の部屋なんだよ……絶対

に悪意あるよこれ……

なんて思いながらドアをノックする。

……が

幸希「……あれ？」

おかしいなあ……昼間なのに寝てるのかな？

あ、そうかそれもそうだ寝てるよなうんだって昼間だもの。

幸希「…仕方ない。スペルカード関係を覚えたいし紫もやしの所に行きますか」
こんな事は絶対に本人に言えんな。

それで…：大図書館は何処へ…：

幸希「はあ…」

探すだけでこの話終わりそうだ…：

メタイ事はあまり言わないようにして、探しますか…。

しばらく歩くと妖精メイドが二人並んで歩いているのが見えた。

ワンちゃん聞いて見るか。

幸希「ねえ！そのメイドさん」

妖精メイドA「うん、そうそへっ?!」

どうやら話の途中らしくびっくりさせてしまったらしい…

幸希「あ、ごめんね、何か話してたのかな？ちよつと尋ねたいことがあってね」

妖精メイドB「えーと…」

幸希「あ、ごめん自己紹介がまだだったね。幸希って言うんだ。昨日来たばかりだから分からないのも無理ないね」

咲夜やコアは説明してくれなかったのだろうか…それとも、妖精メイドは所詮モブと

しか考えてないのだろうか…

普通に可愛いしいい子だと思っけどな…

死んでも復活するとかその程度なのかな…

それとも俺なんか話す価値もないとか…（泣）

そんな事考えてると不意に声をかけられた。

何してんのよ

幸希「うわっ!?!」

いきなり後ろからは駄目だよ咲夜さん

怖いからやめて下さい俺の残基はもうゼロです。

咲夜「アンタ幾ら何でも妖精メイドを襲うだなんて…流石の私も引くわ…見かけどうりと言えばそうなのかしら」

幸希「変な誤解生むような事言わないで下さい。」

幾ら何でも酷すぎる…ホント

妖精メイドB「何か聞きたいことがあるらしいです」

メイドちゃんナイスフオロー！助かった！

咲夜「聞きたい事？何かしら」

幸希「実はレミリアお嬢様達に修行をつけてもらおうかと思ひまして。」

咲夜「修行？どうしてかしら？」

幸希「咲夜さんコアさんから聞いたと思いますが、しばらく後の話ですが、ココ（幻想郷）に脅威が迫ってくるそうです。」

咲夜「ええ、聞いてるわ。それで貴方が修行する事と何が関係するのよ」

随分な言い様だ。前世は毒草か何かですが？ええ?!

幸希「…紫さんにも手助けして欲しいって言われたんです。だから、今のうちに何かしら出来る事と思ひまして」

咲夜「…」

咲夜「…下らない」

幸希「…え」

咲夜「下らないと言ったのよ。あんたみたいな人間風情がそんな事した所で何もならないわ。主人公気取りもいい加減にしなさい。あんたは何も出来やしないわ。」

幸希「…」

まるで可愛そうなモノを見るかの様な目を向けていた。

こんなに酷いやつなのか、咲夜は…

俺の知ってる咲夜じゃない…

咲夜「あんたみたいな奴は…」

そこまでしなさい。咲夜

咲夜「お、お嬢様!!」

突然の登場にその場にいたものはびっくりした。

いきなり目の前にレミリアが現れたのだ。なんの前触れもなく。

いや、話し込んでいて気づかなかっただけかも知れないけど…。

レミリア「幸希、貴方修行したいのよね？」

幸希「はい！出来る事は最善を尽くす、こんな俺でも「可能性はゼロでは無い」はずです！この頬の波紋はイジメや親父の暴力の原因になったけど、ここ（幻想郷）を守る何かしらの手助けになる筈です！」

レミリア「！」

レミリアはある言葉聞き逃さなかった。

フフ…やはり貴方は…

レミリアはここで確信をついた。

レミリア「いいわ、それならまずはパチエや美鈴の二人に修行つけさせてもらいなさい。」

レミリア「貴方見るからにヒョロヒョロしてるから、美鈴に少し身体を鍛えて貰ってから、魔法や魔術、スペカをパチエに教わりなさい。魔法とかは特に体力の消耗もある

からね。」

幸希「わかりました！ありがとうございます！」

レミリア「良いのよ。私達もココは大事だし、貴方が少しでも強くなれば…楽しみだからね」

俺腰を九十度まで下げお礼をした。

しかし、楽しみとは一体…

レミリア「それじゃあ、咲夜パチエの所に案内してあげなさい。」

咲夜「…ッ！…かしこまりました…。…こつちよ」

幸希「…」

俺は無言で昨夜の後を追う。

何も言う事はない。

レミリア「あ、そうそう。咲夜」

咲夜「…はい何でしょうかお嬢様」

咲夜は何処かピリピリしながらもレミリアの方を見て聞く。

レミリア「あまり彼の事をイジメちゃだめよ。彼は貴方と同じ「人間」なのだから仲良くしなさい」

咲夜「…承知しました。」

咲夜「失礼します」

咲夜は臍に落ちないと言わんばかりの態度で、俺をパチエの所に案内し始めた。

何で私がこんな奴を…同じ人間？

こんな奴と一緒にしないで欲しい。

汚い生き物（人間）と何か一緒になんかされたくないわ。

咲夜は苛立ちを抑えながら幸希をパチエの所まで案内した。

レミリア「はあ…全くあの子は…あ、ごめんなさいね。完全に空気だったわね貴女達」
妖精メイド二人「あはは…」

レミリア「たまにでいいからさ、幸希の事見てくれないかしら」

妖精メイドA「幸希さんをですか？」

レミリア「ええ、彼は人間であって人間じゃないから」

妖精メイドB「そうなんですか!？」

レミリア「ええ、そうよ。でも、悪い子では無いわ。だけど、見ておいて欲しいの。別に随時見てるとは言わないわ。見れる時に見てあげて欲しい。それでいいの」

私は彼の変化を楽しみたいし、何より彼が「ハピネス・スカーレット」に戻る瞬間を早くに知りたい…。

ハピネスはフランと私の唯一の弟……

早く会いたい……

レミリア「頼んだわよ」

妖精メイドB「分かりました！」

レミリア「よろしい。お仕事の方も無理しない程度に頑張って頂戴」

妖精メイドA「はい！お気遣いありがとうございます！それでは失礼します」

妖精メイドB「失礼します！」

妖精メイド達はレミリアに会釈すると、真っ直ぐ歩いていった。

楽しみだわ……本当に……

レミリアはハピネスに合う事が待ち遠しくてたまらない……そんな思いにふけていた。

咲夜「……ここが、パチュリー様がいる大図書館よ」

咲夜は相変わらずトーンの低い声で地下下したにある扉を指差した。

幸希「……ありがとうございます。」

一応、礼だけは言っておく。礼だけは。

咲夜「……レミリアお嬢様がアンタを気に入ってる理由が分からないわ」

幸希「……」

何を言うかと思えば：俺だって知るかそんな事。

でも、何かしら理由があるのだろう。だが、このまま言われっぱなしは腹が立つので言い返してやろう。

幸希「：そんな事自分は知りません。レミリアお嬢様のみぞ知るです。と言うか、咲夜さん嫉妬しているんですか？」

咲夜「何ですって?!」

凶星の様だ。珍しく躊躇している。あの完全に瀟洒なメイドさんが。

笑えてくる。

幸希「何です？いくら男と言えど、スペルカードもろくに使えない人間相手に、咲夜さんお得意の「時間を操る程度の能力」で俺をその太ももに刺してるナイフで、ズタズタに引き裂くんですか。」

咲夜「なっ!?!な、何で私の能力を…?」

幸希「コアさんから聞いていないんですか？俺は東方Projectというものをやっていたんです。そして、その作品には貴方方が出ているんですよ。だから知ってるんです。まあ、幻想入りした瞬間はびっくりしましたがね。ここに来れるとは思いませんでしたので。」

淡々と話す幸希に驚きを隠せない咲夜。

こ、こんな奴がレミリアお嬢様に気に入られるわけ?!
気持ち悪い! なんなのよ! こいつは!

咲夜は自分の能力を見透かされた事、レミリアが幸希の事を気に入っている事に苛
立っていた。

咲夜「気持ち悪い!」

幸希「:…どうとでも言つて下さい。その程度の人つて認知しますんで」

咲夜「このっ!」

辞めなさい。

一言、言葉が出たと思つたらナイフを片手に、もう片方の手で幸希の胸ぐらを掴もう
とする手が止まった。

パチュリィ「貴女、人間でありながら人間を殺すのかしら? それに、レミィに言われ
たのではなくて?」

咲夜「つく…!」

咲夜はなくなきナイフをフアスナーにしまった。

パチュリィ「それに貴方も調子に乗りすぎじゃない?」

今度は幸希に風向きが変わる。

流星に焦つたが自分で言つた事だ。傍から見れば小生意気な野郎としか思われない

だろ。ましてや幻想入りして間もないのだから…。

幸希「すみません…」

パチュリー「はあ…あなた達、喧嘩ばかりしないでよね。」

それそうと切り返す動かない大図書館さん

パチュリー「それで？何であなた達はここ（図書館の前）にいるのかしら？」

幸希「そうです！パ…：…ノレッジさんにお問い合わせと言うか相談がありました…」

名前呼びしそうになり言い直す幸希

それを見かねたパチュリーさんは

パチュリー「別に名前でもいいわよ。それで私に何か用？」

幸希「ありがとうございます、それで用事ですが…」

先を促されたので説明した。

パチュリー「わかったわ。コアにも手伝ってもらうわ。あと美鈴ね。」

幸希「いいのですか？」

パチュリー「ええ、構わないわ。むしろ戦力が多いに越したことないし…それに…」

幸希「？」

パチュリー「何でもないわ。咲夜、仕事に戻って良いわよ」

咲夜「…かしこまりました」

パチン

パチユリーは何かを誤魔化すかのようには夜を行かせた。

明らかに何かを隠してる…と言うよりかは、先を急ぎたいと言うのが感じられる。

パチユリー「とりあえず、図書館に入りなさい」

幸希「わ、分かりました」

幸希はパチユリーの後を追い図書館に入っていた。

大図書館

パチユリー「ここが私の居住してる図書館よ」

幸希「やばっ?!」

思わず心の声が出てしまった。

広々とした空間がそこにあつた。図書館とは思えない程の広さ。しかし、見渡す限り本と本棚ばかりなので、図書館に変わりないのだが…

幸希「す…凄い…」

パチユリー「はいはい、感想は後で聞くわ。それより着いてきて」

幸希「あ、はい！」

そして、よく見たパチュリーがよく座る机まで来た。その脇にコアがいた。

コア「パチュリー様おかえりなさい」

パチュリー「別におかえりと言われるほどの距離を歩いてないし、時間も経ってないのだけれど：まあいいわそれよりコア」

コア「はい！何でしょうか？」

パチュリー「美鈴を呼んできて」

コア「かしこまりました！」

敬礼をしたと思ったら物凄いスピードで図書館を後にした。

え？速くない？大丈夫なの？

パチュリー「すぐに来るわ」

数分後：

コア「ただ今戻りました！」

美鈴「あ、パチュリー様、幸希さんお待たせしました！コアさんから話は聞いてます！修行とあればこの私紅美鈴におまかせあれ！」

速い：限りなく速い：

二人して怖いくらい早いんだけど：距離あるだろ：図書館から門前まで：

パチュリー「それじゃ始めるわよ」

幸希「お願いします…」

驚きを隠せないまま修行をする事に…

それから俺は修行に明け暮れた…。

まずは紅魔館周り1000周。

嘘だと思っ？ノンノンノン

次の日は足が笑ってました（?、∇、?）

一日休んで、腕立て、腹筋、スクワット、各1000回ずつ、1000セット。次の日は、体が鉛のように重かった…。

そんな感じで一週間やらされた。

死ぬかと思った…いや、ぶっちゃけ死神が見えた…。

幸希「…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

パチユリー「…美鈴」

美鈴「はい！」

パチユリー「…随分とハードな修行ね…私なんか到底できないわ…」

パチユリーもびびっくりなハードな修行である。

美鈴「しかし、パチユリー様、彼明らかに人間超えています」

パチユリー「そりやそうよね…あんなハードな…え？」

美鈴「だから、並の人間じゃ出来ませんこんな事。しかし彼はやり遂げた…パチユリー様ならこの意味わかるところなのですが…」

パチユリーは美鈴の言いたいことはなんとなく分かっていた。

彼だと…彼の生まれ変わりだと美鈴は言いたいよね…。

幸希「はあ…苦しい…二人して…何はな……している……んですか…」

美鈴「呼吸整えてから、話して下さい…汗」

幸希は自分は動いて二人はほとんど動かない…ちよつとだけ恨んだ…

俺……生きていられるかな…

恨んだと同時に自分が生きていられるか、不安でたまらなかった…

End

第六話 「咲夜の過去」

一週間前

ガジガジガジ……

私は今メイドとして、あるまじき行為をしている。無意識にやっつけてしまう行為
爪をかじる行為……寂しさから苛立ちまで人それぞれやるであろうこの行為。

因みに私の場合、後者にあたる。何故なら最近幻想入りした人間……

幸希だ

こいつのせいでどれだけ腹を立てているか……仕事にまで支障をきたす。挙げ句の果
てにレミリアお嬢様や妹様までお気に召されてる……。

私の立場が失くなつていくかのような喪失感を感じる……。

あいつさえ……あいつさえいなければ……！

人間なんて……！

咲夜、らしくないね

咲夜「!」

いきなり後ろから声がして無意識に噛んでた爪を少し剥いでもった…血が出て地味に痛い…

その指を隠しながら自分を呼ぶ人に体を向ける。

咲夜「妹様、いつからいらしたのですか？」

フラン「いや今咲夜見つけたところ」

咲夜「左様ですか」

いけない、悪循環だ。このまま気持ちを変えなければ更に仕事に支障をきたす。切り替えないと……

『そうね……貴方は十六夜　咲夜』

お嬢様の言葉が一瞬思い出す。

そう、私はあのお方のメイド…こんな事で悩んでも仕方ないわ。

フラン「咲夜って幸希の事嫌い？」

咲夜「…え？」

フラン「私が見るからに同族嫌悪って奴ね。でもね咲夜、貴女が思ってるほど彼は悪くないよ。それに……」

貴女と似ているわ

咲夜「?!」

どこが似ているというのか……あんな汚れた生き物（人間）……

私は人間であつて人間じゃない。そんなモノ（心）とうに捨てた。

私は空っぽな存在だ……ただ、お嬢様達の世話をするだけの言わば、人形。

でも、そしたら私って一体……

フラン「はあ……咲夜貴女あまり変わつてないわね……あの時」から。少し成長してる部分もあるけど、ほんの一部ね」

咲夜「……あの、妹様が言わんとしてる事がよく分かりません」
何が言いたいのかさっぱりだ。

成長してない？そんなバカな。明らかに成長している、物理的にも精神的も、何よりお嬢様の存在がどれだけ大きいか……お嬢様がいるから私がいる……成長出来る、そう言つても過言ではない。

フラン「いや、逆かもしれないわね…まだ、私達と会って間もない頃の方がマシだったかしら。」

『咲夜、これからよろしくね』

ドラク○何処まで進んだ？

昨日のあれ見た？

ううん見てない。

お前勿体無いなあ、見た方がいいって

今日お前んち行つてファミコ○やろうぜ

いいね！

ワイワイ

私はこの世界が嫌いだ…何もかもが…

お父さんもお母さんもおじいちゃんもおばあちゃんも学校も同級生も何もかもが嫌いだ。

皆いなくなればいいのに……そして私も……

ドツクン！

まただ！何でいつもいつも！

私は時より、私以外の人や物が何でも止まる時がある。それはなんの気無しに唐突に起きる。まるで映画やアニメを鑑賞していたビデオを一時停止したかのように、忽然と止まる。

更に気持ちの悪いことに、色合いも変になる……毎回毎回これで吐いた。そして、いつかは時は動き出しその吐瀉物が周りにみられ、周りからすればいきなり目の前に吐瀉物がある。そんな状況だ。

傍から見れば、気色悪いだろう。

この現象を初めて目の当たりにした時は止まつてる人に話しかけていた。勿論、ある一定の時間が経てば時は動き出す。しかし、動き出せば、私が今までいた場所にいたの

にとんでもない所にいる。

傍から見れば、瞬間移動したも同然。

それから私は気味悪がられた：

そんなのわかつてる気色悪い事は：けれど避けられるのはとても辛かった：いやまだマシなのかも知れない：

おい！お前のソレは何なんだ！

何でこんな子を産んだんだお前らは！

くそが！俺らが産みたくて産んだんじゃねえ！

アンタなんか産まなきゃ良かった：！

親戚身内、親にも拒絶された：

お前なにそれ？気持ち悪い近づくなよ！

あー来たよ、瞬間移動さんが！やばっ！

同級生にも馬鹿にされる始末：

私は生まれてからずっとこの忌々しい能力と付き合ってる。
自殺も考えたがそんな事出来るほど私は強くない。

精神がどうにかなりそうだった。

でもそんな私でも生き甲斐がある。

そして、唯一好きな事。

それは…

自然だ。

山や海、森、林、木々が生い茂る神社など、そういった所はとても心が落ち着く。

幸い私が住む場所は自然が多い場所だ。

毎日放課後はそれぞれの場所に行く。

そして、今日もそんな日だったのだが…

サクヤ「…あれ？いつもと何だか雰囲気が違う」

今日は森に入って行こうと思ったのだが、奥に入るにつれいつも見る風景が違う事に

気づく。

もしかして…と一瞬足を止めた。

迷子になったか、あるいは神隠しのなものか、あるいは霊的な事か…
何にせよどうでも良いとまた歩き出した。

どうせ生きていても楽しい事なんてない、嬉しい事なんてない。

泣きたい時に泣けない、笑いたい時に笑えない。そんな人生まっぴら。
どうでも良い。親も親戚も同級生も先生も…そして、私も

そう、思いながら歩いていると開けた場所についた。

いつの間にか夜になってたのか、星々が見えた…

ん?! 星々!!

サクヤ「な、なんで…こんなに星なんか…」

上を向けばまるでアニメや漫画の世界に飛び込んだのかと錯覚する程の、星々が綺麗に輝いていた。

これは一体…

あら、こんな所に人間の女の子が…

美味しそうね…

サクヤ「え？」

??? 「まあ、食べやしないけど」

意味の分からない事を言い出す人？がそこにいた。

てか、女の子？何を言っているのだ。

意味の分からない上に自分の幼体を柵に上げて、私に向かって女の子だなんて……

甚だしい

??? 「…あなた今小さいとか思わなかった？」

サクヤ「…いえ、何も」

はあとため息を付かれる。

いやため息をつきたいのはこっちなのだが……

??? 「貴女、名前は？」

サクヤ「…サクヤ」

レミリア「そう、サクヤと言うのね。私はレミリア・スカーレット。レミリアお嬢様と呼びなさい」

何言つてのコイツ……

お嬢様気取りも甚だしい。頭どうかしている。こんな奴と付き合う義理なんてない。

下らない。

サクヤ「…知らないわよそんな事。お嬢様だから何？見るからに私より年齢も身長も低いじゃないの。偉そうにしないでよ」

私は、羽の生えた幼女を小馬鹿にした：

え?!羽!?

は…はねが生えてる…

わなわなと動揺する私をよそに、レミリアは口を開いた。

レミリア「あらあら、随分な言いようね…悪いけど貴女より400年以上は生きてるし、知識もあるわ。人…いや、物事を見た目で判断するのはよしなさい。それから、この国には「口は災いの元」と言う言葉があるでしょ？あまり余計な事は言わない方がいいわよ。私だから良いけど、他の奴（妖怪）なら食われちゃうわよ」

400年…!?

私は夢でも見ているのだろうか…

目の前の羽の生えた（偽物のかも）幼女は400年生きていたと言う。

アホくさ…そんな事あるわけ無い。

私は帰ることにした。忠告も聞くことなんてない。

私は空っぽなのだから…

レミリア「あら、帰るの？でも貴女、帰った所で「帰る場所」何てあるの？」

足が止まる。

まるで私の事を知ってるかの様な言いようだ。

何が言いたいのだこいつは?!

恐怖よりも疑惑が激しかった。なぜ、帰る場所なんて聞いてくるんだ? 明らかに私の私生活を見ているとしか思えない。

レミリア「ああ、良い忘れてたけどここは幻想郷って所よ。それから貴女の私生活、あの程度見させてもらってるわ。」

幻想郷?

それが何か今は関係ないだろう。どちらかと言えば後者だ。

なぜ私の私生活を知っている? 私は疑問をぶつけた。

サクヤ「…私の何を知ってると言うの?」

レミリア「さつきも言ったわ。ある程度よ。全てを知るなんてそんなこと私にはできないわ。でも、つまらない人生を送ってるじゃない? そこで提案なのだけれど…」

明らかに私の私生活を知っている…どこまで知っているのかは教えてくれなかったけれど……

レミリア「私のメイドにならない?」

『私のメイドにならない?』

何を言うかと思えばメイドだと?

私はひとまず帰ることにした。帰路を歩きながら先程のメイド勧誘の事を思い出していた。

サクヤ『…は?』

レミリア『悪い話じゃないと思うわ。少なくとも貴女の能力を見越して、そして貴女の今まで見てきた人生において、聞いてみたのだけれど…』

レミリア『まあ、時間はあるからゆっくり考えなさい。いつでも待ってるわ。ああ、それから』

『来た道戻れば帰れるわよ』

サクヤ『…』

メイド……

確かに今現状より遥かに良いのかもしれない。自分の能力を使ってやれるかどうかは分からないけど…

サクヤ「…メイド…か」

下らないとか甚だしいとか色々、あのお嬢様に心の中で文句を言っていたが、どこか惹かれる部分もあつたのは確かだ。

…よくはわからないけど

私はそのまま来た道を戻り、いつもの森の入り口についた。

どうやら結構な時間居たらしく、夜になっていた…いや、あそこ（幻想郷）にいたの時既に夜だったし当たり前か…

でも、こっちは（幻想郷の外）では

星々が全然見れない

おかえり

サクヤ「…ただいま」

適当に飯食いな。私らは寝るから。

サクヤ「…分かった」

ご飯も親子で食べた事がない。たまに、テレビで親子で食べてるシーンを見るけど、

とても羨ましくてたまらない…

サクヤ「…いただきます」

部屋に一人ポツンと座り込みご飯を食べる。

しかし、そのご飯も白米とおしんこのみ…いや、マシか…

サクヤ「…ごちそうさま」

皿を片付け、歯を磨き寢床につく。

そして、昼間(?)の出来事思い出す…

『私のメイドにならない?』

レミリア・スカーレット

私はこの日から彼女の使いになろうと薄々考えていた。

ドゴツ!

サクヤ「痛い!」

急に背中に鈍い痛みが走る。そのせいで無理矢理目が覚めた。

おら! 起きろ! 学校遅刻するぞ! さっさと行け!

また蹴り飛ばされる。

サクヤ「ご、ごめんなさい! 今行くから!」

親に反抗する気か?! ああ?!

サクヤ「ごめんなさい!」

いつも朝はこうやって父親に起こされる…お陰様で背中ではあざだらけ…

夜お風呂に入る時に鏡に映る自分の背中…思い出したくもない…

いつもいつも父親に蹴り飛ばされる…痛くても毎日毎日蹴られる…

私は痛みを堪えながら学校に行く準備をする。

遅刻したら承知しねえからな! わかったか!

サクヤ「わ、分かった…」

辛い…

私はまた蹴られないように、家を飛び出した。

学校についても同級生から色々言われる…

あ、きたよ…

うわホントだ…毎日懲りないね…言われるのが嬉しいとか?

うわきもっ!

ヒソヒソと聞こえる声。いや、わざと聞こえるように言っているのかもしれない…

ガラガラ

ほらー席につけ…とサクヤ

邪魔だ、さっさと席に付け

サクヤ「…はい」

先生も口が相変わらず悪い…だから嫌なのだ…

授業中、私は昨日の事をずっと頭の中でループしていた。

『私のメイドにならない?』

このセリフがどうしても拭いきらない…

むしろ都合なのだろう…こんな人生…

私は放課後昨日と同じ場所にいた。

必要なものは…この懐中時計のみ

学校に行く前にランドセルに入れておいたものだ。

これはどうしても持っていたかった。ランドセルをその場に捨て、もりの中に入っていた。

しばらく歩いていると、開けた場所についた。昨日来た場所だ。

あたりは既に夕方だった。やはり若干時間がズレているのかもしれない。しかし、昨日あつたレミリアが見当たらない。

サクヤ「れ……レミリアさーん！」

何度か呼ぶも返事がない。

グオオオアア！

サクヤ「誰！」

森の茂みから、希声が聞こえ身震いがした。

オイシソウナニンゲン……イタダキマス！

サクヤ「きやあ！来ないで！」

何でよりによつてこんな怪物に……！

んな事考えてる暇何てない、わたしはひたすら逃げた……が、

サクヤ「きやつ！」

石につまずいてしまった。

しかも、その勢いで足を挫いてしまった。

サクヤ「……」

モウニゲラレナイ……ウヒヒヒ

……ああ、最後の最後までくそ混ぜた人生だったなあ

まあ、いいか。誰も悲しまないし、死にたいとさえ思った時もあったのだから…今こうして死ね…

ちよつとそこの雑魚妖怪、私のメイドに何してるのかしら？

いきなり目の前に槍（？）が私と怪物の間に飛んで来て、地面に刺さった。

誰？と槍が飛んできた方向を見ると…

レミリア「アンタらしくないわね。いくら私が遅れたからって、抗いもしないなんて。」

レ、レミリア…！

レミリア「呼び捨てとはいい度胸ね！呼び捨てに出来るのは——とその娘だけよ！」

ウギヤアアアア

レミリアは手から何やら光る物をだし、怪物もとい妖怪を退治？した。お陰様でたすかった。

サクヤ「あ、ありがとうございます…」

レミリア「ふふん、礼には及ばないわ。私に用があつてきたのでしよう」

サクヤ「え、あ、はい！」

レミリア「いい返事ね、少しはマシになったじゃない。」

サクヤ「あ、あの」

私はレミリアのメイドになると決めた。今のもそうだが、もうあんな人生まっぴらだ。それなら、私は私なりに前を進めばいいのだ。

レミリアが道案内してくれるのだから、それに甘えてもいいのではないか。私はそう思い、レミリアのメイドになる事を伝えた。

レミリア「わかったわ」

サクヤ「よろしくお願いします」

レミリア「そうだ、サクヤってのもいいけど私が直々に名前を言い渡してもいいかしら？」

サクヤ「是非！」

昨日、『私のメイドにならない？』と言われた時から、

私の心は最早彼女のものになっていたのかも知れない。

レミリア「そうね……貴方は十六夜 咲夜」

レミリア「十六夜は昨日十六夜月だったから。昨日とは昨夜とも言う。そして、その昨夜とサクヤを掛けて咲夜。」

咲夜「十六夜 咲夜……」

レミリアお嬢様が私に命名してくれた……私はとても嬉しかった……

この人の為に頑張ろう…この人の為に命を捧げよう…

私は心の底からそう思った。

レミリア「咲夜、これからよろしくね」

咲夜「はい！レミリアお嬢様」

私は思いつきり返事をした。

幸希「咲夜さんにそんな過去が…」

俺は今修行を一通り終わらせて美鈴が作ってくれたチャーハンを食べていた。そこへレミリアが来て、咲夜の愚痴を少しこぼしたら咲夜の過去話を聞かされた。

色々な東方 project のSSを見てきたが、現実とはやはり違う。

やっぱり彼女達は色々と苦い経験をしているようだ。

そして、咲夜に対する偏見や嫌な気持ちも無くなった。彼女には悪い事をした。それこそ、レミリアが咲夜にいった「見た目だけで判断するのは良くない」この台詞は俺にも言えるだろう。

レミリア「まあ、私が咲夜の私生活を見たのと話した時の話をしてるだけだから、はっ

きりとは分からないけどね。でも、彼女はそれなりに苦勞してるわ」

レミリアが言うならそうなんだろうな：

レミリア「幸希」

幸希「はい？何でしょうか？」

レミリア「咲夜はまだまだだし、弱い所があるのよ。そして、素直になれないの。でも分かつてあげて。ああいう子だから」

レミリアにしては珍しくしおらしかった。いや、家族思いなのかもしれない。こんなレミリアが俺は好きだ。だから推し何だよね。

幸希「大丈夫です。元々何かしら後ろめたい事があるだろうとは思ってましたし、レミリアお嬢様から聞いた話もあるので、少しずつでも咲夜に対しての考え方を変えていきます。」

レミリア「ありがとう、そうしてくれると助かるわ。」

幸希「いえ、寧ろお礼を言うのは自分の方です。ありがとうございます」

レミリア「ふふ、そうかもね」

美鈴・パチエ「完全に空気」

美鈴とパチエの事は忘れ二人は話し込んでいた。

幸希は少しずつでも変えていこうと思った。彼女に謝る事が出来なくても、対応から変えていこう。そうすれば自ずと仲良くなれるはずだ。

仲が悪いより良い方がいいに決まってるし。レミリアの顔もあるしね。

幸希「よし！美鈴さん続きお願いします！」

俺は飯を食い終えまた修行に戻った。

レミリア「因みに彼どんな感じ？」

パチエ「人間離れしてるわ。美鈴のハードな修行を最初の二、三日こそキツそうにしてたけど、今じゃ難なくやってるわ。この調子なら私の出番も早いかもしれないわね」

レミリア「そう。まあ、そうじゃなきゃ困るけれどね」

パチエ「それもそうね」

レミリアの期待は更に上がっていった。

会える日が楽しみだわ…

咲夜「…」

外にいる幸希たちを廊下の窓から見下ろす咲夜がそこにはいた…

e
n
d

第七話「ならず者の二人」

一ヶ月後

あれから一ヶ月、紅美鈴と修業続けてきた。最初こそハードでキツかったが、今では空は自由に飛べるし武術も殆ど出来るようになった。

美鈴と互角とは言わないが、組手をやれば美鈴に対し長期戦まで持ち堪えられる程になった。

そして、そろそろ弾幕やスペルカードを作る時が近づいてきた。

美鈴「はあ！」

幸希「くっ！……はあああ！」

強い！相変わらず強過ぎる！

だが、今ではある程度渡れる！このまま押し込むぞ！

幸希「もらったあ！」

美鈴「……しまっ！」

バチン！

決まった！

そう思った……が

美鈴「ふう……危ない危ない危うく顔面にパンチ食らうところでしたよ」

余裕そうに幸希の渾身の拳を片手で受け止めていた。

幸希「あーやっぱり無理かー……」

と残念そうにしているが、5時間ぶつ続けでやつてるとは思えないほど疲れた顔を伺えない。

修業して一ヶ月、彼は相当な力を身につけていた。

美鈴と長期戦する程に……

美鈴「人間にしては本当に凄いです！疲れた顔一つしないなんて」

やはり貴方は……

幸希「自分もここまで力をつけられるとは思いませんでしたよ。外の世界でも少しは体動かしてれば良かったです……」

美鈴「いえ、十分に強いです！大丈夫ですよ！まだやりますか？」

起きてからずつとぶつ通しだと言うのに何を言うかと思えば……

幸希「はい！お願いします！」

ちよつと待つてよ貴方達！

悲鳴にも似た声がした。そんな普段聞き慣れている声の方に二人は挨拶した。

幸希「おはようございます、パチユリー様」

美鈴「今はお昼ですよ！こんにちは、パチユリー様」

パチユリー「ええ……こんにちは……？おはよう……？……つて違うわよ！いいかげんにや

めなさい！周りを見てよ！」

言われた通りに周りを見ると……

紅魔館の外でやつていたとはいえ、門の扉大破しており、外壁も傷だらけ、紅魔館周りも荒野化としていた……

幸希「……え、こんなになつてたんですか？」

自分でも信じられないと思つた……こんなに暴れていたとは……

美鈴「あはは……随分と派手にやつちやいましたね……」

パチユリー「……はあ……何なのよあんだ達は……少しは悪びれたらどうなの？」

頭を掻きながら反省の色を見せない美鈴に、現状に啞然としてる幸希に、パチユリーは呆氣にとられていた。スペカの事もあるし様子を見ればこの惨事だ。この先が不安で仕方なかつた……

???「あやややや！これはこれは、いい記事が書けそうですね！題して、「謎の少年の幻想入り！その神秘たる力とは!」良いですね！何だかやる気がアップしますよ！」

紅魔館から数キロ離れた所にあるマスゴミ……マスコミがいた。

幸希「…美鈴さん」

美鈴「おお！気づかれましたか？」

幸希「はい、結構離れていますですが誰かこちらを見えます」

パチュリー「いやいや、誤魔化そうとしても無駄だからね！ちゃんと片付けなさいよ！」

幸希「分かりました。掃除しておきます」

本当にいるんだけどなあ……と思いつつも掃除する事にした。

美鈴「誰だか分かりますか？」

掃除をしてしばらくして美鈴から聞かれた。

幸希「いやいやあつた事も無いのに分かるわけないじゃないですか」

あつても居ない人を当てるのはなかなかのものだろ。いくら誰かが見ると分かっていても特定の人まで当てられる訳がない。

誰かが見てるなんて、この幻想郷じゃ誰にでも当てはまる。正に障子に目、壁に耳あ

りだ。

何にせよ悪さは出来ない。するつもりも無いが。

美鈴「流石に無理でしたか。そうですね、アレは射命丸文さんですね」

幸希「なるほど、射命丸文さんですか……ずっとこっちを見てるなんて、何だかストーリーみたいですね」

ちよつとちよつと！誰がストーリーですって！

バサリと一瞬羽根を広げ地面に足をつけて目の前に現れた、女性。

現代ではまず見えない容姿、散々イラストなどで見た事ある彼女だけど、見入ってしまった程に綺麗な人だ。と言うか幻想郷の女性はきれいだったたり可愛い人ばかりだ。

だが、この幻想郷の文さんはどうなのだろうか……

見た目は可愛くても中身がブスだったら話にならない……。

そんな烏帽子の様な小さな帽子を被り、いかにもこれから取材しますよと言わんばかりに、メモ帳と万葉筆を持った彼女からいきなり責められた。

文「貴方はどこから来てなぜここに居るのですか?! 貴方は人間ですよね? どうしてそんなに人間離れたした動きができるのですか?! 貴方はいくつですか?! 背は? 体重は? 女性経験は?!」

幸希「ちよ、まっ……」

美鈴「文さん落ち着いて下さい！ちゃんと話の場を設けますから！」

最後とんでもない事を言つてた気がするが……まあ、今までに見てきた射命丸文とは違つた個性的な彼女も何だかいいなと、取つ組み合いになりながらもそんな事を思つた。

レミリア「…それでなんで私の部屋なの？」

文「いいじゃないですか！減るもんじゃないですし」

レミリア「いや、そういう事じゃないのよ。単に貴女がうざいのよ」

文「もうもうレミリアちゃんたら恥ずかしがり屋なんだか…いたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたいいたい！」

幸希（あの美鈴さん、俺の知つてる文さんじゃないんですけど…）

美鈴（彼女は幼女が好きでして…）

レミリア「美鈴、貴女今言つてはいけない事、言わなかつたかしら？」

美鈴「ととととととととととととでもございません！何も言つてません!!」

なるほど、文はロリコン、レミリアは幼女呼ばわりされるのが苦手なのか

レミリア「幸希！貴方は何納得したように頷いてるのよ!!」

文「うふふふ、レミリアちゃんにもちゃんと一対一で、取材してあ、げ、る」

レミリア「お願いだからやめて頂戴……」

まるでゲテモノを見るかの様に拒絶するお嬢様……

文レミ……なかなかじゃないか！いいぞ！もつとやれ！

話が進まないので何やかんやで取材される事に

文「先程聞いたことと同じです。貴方はどこから来て……って外から来たんですよね？」

幸希「まあ、そうですね」

レミリア「あの文、離してくれるかしら？」

今の現状を伝えると、用意された椅子に座り机を挟んで、文と自分と向かい合って話しているのだが、文の足の上にはレミリアが抱っこされてる状態だった。

目の保養とはこの事か。

レミリア「だから！幸希も納得した顔しないで助けてよ！美鈴でもいいからって、いねえーし！」

因みに咲夜さんは外出中

幻想郷は今日も平和である。

そして、レミリアを抱っこしながらの取材が終わり

文「それでは、私はこれにて、またお邪魔しますね」

レミリア「もう来んな」

文「うふふふふ、素直じゃないんだからレミリアたん」

レミリア「だからその呼び方もやめろ！／＼／＼」

顔を赤くしながら怒る姿がとても可愛くて仕方なかった…。

ここは天国か？

文「それじゃ…とその前に、幸希さん」

幸希「はい、なんでしょう？」

文は飛んで帰ると思ったがそこで踏み止まり幸希に向き直る

文「…貴方にとっての幻想郷、見つかるといいですね」

幸希「……」

文「それでは、失礼します」

バサツと広げレミリアの部屋の窓から飛んでいった。

あの言葉の真意がわからない。が、何処か懐かしさを覚えた。

俺にとっての幻想郷、か

ダダダダダダ、バタン！

パチュリーいるか！

??? 「なんだいないのかー、ん？」

いきなり扉を蹴り破って出てきたのは、

普通の魔法使い、霧雨魔理沙

相変わらず、乱暴者だな。だが、彼女はとても頑張り屋さんで幻想郷の妖精だろうと何だろうと、昨日の敵は今日の友と言わんばかりに、皆を大事に思ってる。縁の下の力持ち主とは正に彼女のことを言うのだと思う。いきなりの登場に俺はびっくりした。しかし、お嬢様は…

レミリア「一難去ってまた一難……ここは駅のホームじゃないわよ…」

お嬢様、貴女は現代の電車の駅を存じてるのですか？それとも中世のヨーロッパには既に駅が存在してるから？何にせよ、彼女の口から駅のホームと言う言葉が出てくる事にまた驚く。

魔理沙「私達の仲じゃないか！そんな毛嫌いするなよー」

レミリア「別に嫌ってないわ。紅魔館を駅のホームみたいに好きに出入りしてほしくないのよ！美鈴は何してるのよ！」

激怒するレミリアそんな彼女を他所に

魔理沙「あ、思い出した！最近幻想入りしたっていう、えーと…名前が…思い出せないんだぜ…」

初見で彼女の語尾を聞いたらびびっくりする人もいるのではと、思う所ではあるが……しかし、今日はお客さんが多いなあ……

幸希「幸希、俺の名前は幸希。よろしく魔理沙」

魔理沙「ええ！どうして私の名前分かったのぜ?!」

驚いた時ののぜ相変わらずというか何というか……笑えてくる。

幸希「まあ色々あるんだよ」

魔理沙「あー察したのぜ、でもびびくりしたぜ……」

察しが早くて助かるなあ。しかし、霧雨魔理沙思ってた以上に

小さいなあ

魔理沙「お前今私を小さいとか思っただろ！」

幸希「はっはっは……なんの事だか」

魔理沙「……」カチャ

幸希「無言で八卦炉を顔面に向けるの辞めてくれませんか？」

殺気が凄すぎるんですが……

魔理沙「ほう……この道具の名前を知ってるのか、なら使い方も分かるよな？」

幸希「わかった……悪かった」

魔理沙「?!……お、おう分かったなら良いんだぜ！」

何だ今の間は？まあいいか助かったし

しかし、彼女も可愛いなあ…心の声が聞こえないから言いたいこと口にしなきゃ、バ
レないけど…あのコだけには今の俺の心の声を聞かれたくないなあ…フラグじゃー
ねーよ？

魔理沙「そうそう、パチュリーしらないか？図書館に行ってもいなんだぜ」

幸希「パチュリー様はさつき見たけど、もうどこに居るか」

ここに居るわよ

魔理沙「おお、パチュリーこの本借りたいんだけどいいか？」

おお、パツチエさん貴女は神出鬼没かい？

パチュリー「いいわよ。でも、そろそろいい加減に貸した本返して欲しいんだけど」

魔理沙「ごめん、忘れてきちゃった…」

パチュリー「はあ…：…さっさと返さないと貸さないからね」

魔理沙「分かったのぜ…：そんな怒るなよ」

パチュリー「怒ってないわよ」

魔理沙「怒ってるのぜ！」

パチュリー「怒ってないわよ！」

と唾み合いながら何処かへ行ってしまった。

レミリア「はあ…もう疲れるわね…ここは駅のホームじゃないのに…」
と言いながらも口角が上がったのを見過ごさなかつた。

幻想郷、キミは俺に何を見せてくれる？

幸希「お嬢様、お茶を入れましょうか？」

レミリア「だからそんなに畏まらないでよ。貴方は特別なんだから。私と貴方の分用意して頂戴」

俺にとつての幻想郷…それは今この瞬間の幸せだ。

幸希「かしこまりました」

レミリア「もう…」

どうか、このままずっと幸せが、この幻想郷が末永く続いてくれます様に…

後日

文々。新聞が届いて絶句した…

話した事が捏造されてなく、全部ちゃんと書いてある…これが…これがこの世界の幻想郷か!?

と驚いたのはまた別の話。